

6324 ハーモニック・ドライブ・システムズ

長井 啓 (ナガイ アキラ)

株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズ社長

過去最高の売上・利益を達成し、設備投資も過去最高

◆2016年3月期決算の概況

執行役員 上條 和俊

当期は、夏場に需要が落ち込んだため第2四半期に期初の業績予想を下方修正したが、売上・利益ともに修正予想を上回る結果となった。この主な要因は、第3四半期に入って産業用ロボットを中心に受注が急速に回復したことである。特に日本のロボットメーカーからの注文が想定を上回った。この結果、前期比でも増収増益を達成し、売上・利益ともに過去最高額となった。

前年度後半から長野県の主力工場の設備投資を行い、これにより生産能力が増加したため、需要に応じて安定した生産・出荷を行うことができた。一方、このような設備投資のため、減価償却費などが固定費を押し上げた。設備投資は、既存工場だけでなく新工場の建設もあり、過去最高額となった。

主要グループについて、米国子会社は、日本から輸入した製品の販売と現地生産の2つのビジネスを行っているが、半導体、工作機械、医療機器の売上が増加し、増収に伴う操業度の向上が利益を押し上げた。さらに、前期比で円安ドル高となったため、円換算で大幅な増収増益になった。精密遊星減速機を製造している(株)ハーモニック・エイディは、モーターメーカー向けのギアヘッドに加え、スカラ型ロボットの手首軸やパラレルリンク型ロボット向けが増加し、増収増益となった。中国の哈默納科(上海)商贸有限公司は、成長市場ということもあり、大幅な増収増益となった。持分法適用会社であるドイツのハーモニック・ドライブ・アーゲーは、ユーロ換算では増収だが、円換算では1%程度の微減となった。当期純利益が前期比マイナスになっているのは、同社の子会社の株式を売却した際に売却損が出たためで、一過性のものである。

単体業績については、売上高は前期比で増収となったが、営業利益は減益となった。単体の用途別売上高では、半導体製造装置向けは堅調に推移し、増収に貢献した。主に微細化などの設備投資に支えられ、特に前工程の装置メーカーやウェハを搬送するロボットメーカーからの注文が増加した。フラットパネルディスプレイ製造装置向けは、中国の投資に支えられ好調を維持している。当社で最も売上の多い産業用ロボット向けは、自動車製造で使われる溶接・塗装ロボット向けが、中国経済の影響で夏場から若干軟調になったが、組立や搬送用の小型ロボット向けは好調であった。4~5月の盛り上がりの反動で、いったん軟調になったが、第3四半期以降は増加に転じ、足元も含めて好調が続いている。石油掘削装置は、原油価格の影響も受けて、現在はメンテナンス品のみのレベルまで減少している。

単体営業利益の増減要因としては、増収が3億99百万円の増収効果をもたらした一方で、限界利益率の変化が85百万円の減益要因となった。これは、会計上の原価差異やCS関連のコストが前期より増えたためであり、全体の収益力が下がっているわけではない。製造固定費その他の費用増加は、減価償却費の増加で1億31百万円の減益要因となった。販管費の増加は2億45百万円の減益要因となったが、これは人件費と海外での積極的なマーケティング活動や展示会への出展費用の増加によるものである。

連結総資産は前期から7億円減少して487億49百万円であった。現預金と売上債権に大きな変動はないが、

有形固定資産が増えているのは、新工場棟の建設および敷地内に従業員用の立体駐車場を建設したことによる。自己資本比率は76.1%に上昇した。

営業活動によるキャッシュ・フローは64億99百万円と大きくなり、投資活動に資金を振り向けた。結果として、現金及び現金同等物の期末残高は7億円増加した。

◆2017年3月期業績予想

一部には懸念材料もあるが、主要用途全体としては需要が底堅く、なかでもロボット向けは引き続き増加すると予想しており、今期も増収増益を計画している。当期の第4四半期の受注が比較的好調だったこともあり、一定の受注残高を抱えてスタートしているため、上期には相応の売上を見込める状況にある。下期については、正確に見通すのは難しいが、年末から春先にかけて需要が増える傾向が数年続いており、今期もある程度その傾向を織り込んでいる。

売上高は、過去最高の300億円(前期比6.1%増)を予想している。営業利益は、減価償却費や研究開発費の増加、人員増加など、政策的なコスト増加もあり、前期比7.6%増を予想している。経常利益は、ドイツの持分法適用会社の一時的なコスト増が今期はなく、大幅な増益を見込んでいる。設備投資は大きなものは予定していないが、新工場棟の屋根に太陽光パネルを設置するなど、付随工事を計画している。また、新工場棟に入れる機械設備を取得することなどから、連結で36億円を予定している。

米国のハーモニック・ドライブ・エルエルシーは、ドルベースでは増収を見込んでいるが、円高の影響もあり、円換算後の売上高は7.2%の減収となる見込みである。ハーモニック・エイディは、ギアヘッドの足元の需要が軟調であることなどから、増益幅はやや小さく4.8%である。中国子会社の哈默納科(上海)商贸有限公司は、中国に製造・開発拠点を持つ欧州ロボットメーカーやローカルロボットメーカー、ロボットを内製化しているEMSや家電メーカー向けが増える見込んでいる。営業体制も、上海と深圳に加えて、今期は重慶にも拠点を作り、手厚くフォローしていく。

単体の製品群別売上高では、波動歯車装置が全体を牽引する。用途別では、半導体製造装置向けは顧客の操業度が高まっており、フラットパネルディスプレイ製造装置向けも安定した需要が続く。産業用ロボット向けは、スマートフォン用のまとまった案件が前年12月から2月にかけて入っており、その後は一服しているところである。家電組立用などは小口案件が複数ある。また、溶接・塗装ロボット向けは足元が増加に転じており、底打ち感が出ている。モーターメーカー向けギアヘッドは、ステッピングモーターをベースにしたギアヘッドタイプのものが増えていく。第1四半期の受注はややスローダウンするが、大きな落ち込みはなく底堅い受注が続くと見ている。

単体の営業利益の増減要因として、増収の影響で9億80百万円のプラス、限界利益率等の変化で60百万円マイナス、製造固定費等の増加で4億円マイナス、販管費の増加で2億33百万円マイナスを予想している。

◆今後の展望

社長 長井 啓

当社の主力である産業用ロボットの出荷台数は、2015年に前年比8%伸び、今年もかなりの成長が予想されている。地域別では、中国が16%増、中国を除くアジアが5%減となっている。欧米でも増加が続き、特に北米では半分が自動車産業向けであり、自動車産業の設備投資は今後も年率5%で伸びると予想されている。潜在市場として最も大きいのが韓国であり、実際に当社に来ている引き合いでも、韓国の大手企業が独自にロボットを作るとい話が出ている。しかし、韓国は労働組合が強いため、緩やかな伸びになると予想される。日本は、労働人口減少の中、まだまだ伸びる。今日の日経新聞第1面にも、AIとロボットなしに経済成長はないと書かれており、経済産業省も、ロボットとAIを活用しないと2030年には国内雇用が735万人減るといった記事があった。日本の産業力が落ち、人手が不足する中、ロボットとAIを活用して日本のものづくりを維持していく必要がある。

産業用ロボットは、日本の得意分野である。大型で安全柵の中で床に半永久的に固定されるものが多く、主として自動車産業向けである。また、産業用ロボットには「co-bots」というものがあり、これは軽量、ポータブルで、人の近くで協働作業するところに特徴がある。co-bots は将来性が高く、パークレーズ証券は 2025 年に 1.5 兆円市場になると予想している。現在、欧州・米国において、独創的な技術を持つ co-bots メーカーが誕生しており、当社製品を採用いただいている。

また 日本では、ライフロボティクス社が「CORO」という名前の協働作業ロボットを販売している。CORO は他のロボットと違い、ロボットに肘が無い機構を採用している点が特徴である。肘が無いことによって、小さなスペースに設置することが可能である。従来型ロボットは人ができない仕事をするが、co-bots は従来ならアルバイトがするような高付加価値を生まない仕事を引き受ける。co-bots の普及方法については、新聞の報道にもあったように、リース会社がロボットをレンタルし、中小企業や飲食店のオーナーが、作業分だけリース会社にお金を支払うというビジネスモデルで普及が促進すると思われる。

今期は中期経営計画の中間の年度であり、目標達成に向けた体制として、販売と生産と研究開発の 3 つに着実に手を打っている。販売については、台湾に駐在員事務所を作る。これは、中国の GDP の約 15% が IT 関連で、それらは台湾資本であり、現在、中国本土から台湾へ回帰している動きもあるためである。韓国にも遊星減速機のアジア戦略商品を製造する工場を設けており、アジアと日本を 1 つのグループで管理していく。生産については、新工場棟を建設し、将来の生産能力を 6 割引き上げるための環境を整備した。新工場棟は半地下の構造となっており、温度変化、振動等の面で精密加工に適している。今後は需要動向を見極めつつ、工作機械と人員を順次投入していく。まだ工場スペースには余裕があり、工場を増築することも可能である。研究開発については、シリコンバレーにも拠点を設ける予定である。当社から駐在員を出して情報収集などを行うが、AI やロボット技術の最先端に関わり、研究開発をさらに活性化させたい。

(平成 28 年 5 月 20 日・東京)

* 当日の説明会資料は以下の HP アドレスから見ることができます。

<http://www.hds.co.jp/ir/event/accounts/>